

書
評

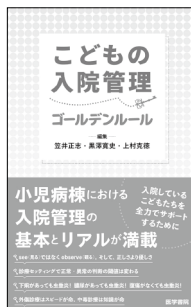
こどもの入院管理 ゴールデンルール

編：笠井 正志，黒澤 寛史，上村 克徳

B6 変型・頁 312 2024 年 01 月 定価：3,960 円(本体 3,600 円＋税 10%)

[ISBN978-4-260-05078-4] 医学書院刊

<評者> 山下 由理子(松戸市立総合医療センター小児科・小児集中治療科)



真の小児科医になるための奥義が詰まったコーチング書

小児科の世界に足を踏み入れたのちに、網羅すべき範囲の広さに絶望したことがある人はきっと少なくない。皮膚疾患から先天性心疾患まで、風邪っぴきから最重症患者まで、専門家の力を借りるとはいえども主治医として対峙しなくてはならない。成書を熟読すべきなのはわかっているが、次々に訪れる患者の対応をしながらではとても勉強が追いつかない。すぎる思いで白衣のポケットに入れた“あんちょこ本”は助けてくれはすれど、書いてあるのは初手のみ。その後の“診かた”はローカルルールかフィーリングにまかせる。のちに上級医に「ちゃんと診なさい」と叱られることになるが、「その“ちゃんと”がわからないのよ?」と心の中で呟いたことがあるのは私だけではないだろう。

本書は紛れもなく、その“ちゃんと”を具体的に教えてくれる指南書である。

第1章「小児科診療の基本」では、その表題のとおり小児科医の根底をなす考え方について触れられている。仮説を立て、それを検証し再考することで診断の正確性を高め、分・時・日・週・月単位でスピード感を把握し、広い ROS から狙いを定めた狭い ROS をすることで診断精度を上げる。簡単なようでとても根気のいるプロセスであり、このルーチンを身につけることは容易ではないが、運動でいえば筋トレ、音楽でいえば基礎練習のような、小児科医として診療行為をするにあたって最も大事な土台の作り方を教えてくれる貴重なセクションであると思う。「小児面接での態度、4つのコツ」(p.5)は笠井正志先生のユーモアが光っていたが、言い得て妙であった。私は、お父さんのことをお祖母さんと呼んでしまった医師を知っている。

筋トレを終えたあとに、ベッドサイドに向かい診療

を開始する。第2章からは具体的に「どう診るか」について記載されている。出会うすべての疾患について学ぶことはもちろん不可能だが、「たまに遭遇するけど知識があやふや」系の疾患が網羅されており、かゆいところに手が届く本である。さらに、本書は診断・治療の情報に加えて、時間経過で何を観察し、留意し、次来る事態に備えて準備すべきなのかに重点を置いているところが特徴的である。コンパクトながら、他書では省かれた、主治医としての奥義を教えてくれる、もはや参考書というよりコーチング書なのではないかと思う。

第5章では基礎疾患や有している医療デバイスごとの管理方法について、第6章では感染管理について記載されている。どちらも日常診療では必須の知識でありながら、効果的に学ぶ機会が少ない分野であり非常に勉強になる。

本書はすぐに使える tips や経験に裏打ちされた pit hole がふんだんに盛り込まれているが、おそらく読んだだけで診療できるような気にさせることが本書の狙いではない。ゴールデンルールを胸に真摯に診療を続けることで、環境に慣れて表面的に診られるようになった「なんちゃって小児科医」ではなく、どのような環境・疾患であっても責任を持って患児に向き合うことができる「真の小児科医」になれるのではないか。そうなったころには、本書の内容を鵲呑みにするのではなく、あえて疑問を見つけて調べたり、自分たちの施設でどう当てはめるかを議論したりして、小児医療をよりいっそう進化させることができるだろう。それこそが、著者たちの真の狙いかもしれない。